

清水・寺山谷遺跡

— 県単独防災事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —



2012年3月

兵庫県多可郡 多可町教育委員会

きよ みず てら やま たに い せき
清水・寺山谷遺跡

— 県単独防災事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —



2012年3月

兵庫県多可郡 多可町教育委員会

序 文

多可町内には、内陸部山岳地帯であるという地形的特徴から、山城や、山岳寺院、山林寺院に関係する遺跡が非常に多く存在しています。

今回報告させていただきます清水・寺山谷遺跡もその一つであります。

これら寺院関係の遺跡は、当地域の歴史の解明にとって、非常に貴重な資料を提供してくれる文化財であるとともに、各時代の先人達の信仰の対象、心のよりどころのひとつであり、現在、各集落に残る社寺へと繋がる、先人たちの心の足跡をあらわすものでもあります。

今回の調査は小規模なものです。こうした調査の積み重ねが、地域の『生きた歴史像の構築』につながっていく貴重な材料として活用され、現在に生きる私たちの指針となることを希望します。

最後になりましたが、発掘調査作業及び整理作業にあたり、多くの方々にご協力・ご指導いただきましたことを厚くお礼申し上げます。

2012年3月

多可町教育委員会

教育長 岸 原 章

例 言

- 1 本書は兵庫県多可郡多可町加美区清水字崎舟山に位置する清水・寺山谷遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は多可町教育委員会が主体となり、教育総務課 課長補佐 安平勝利が担当した。
- 3 遺構等の実測は松田優子・安平が行い、遺構及び遺物写真と遺物実測は安平が行った。
- 4 本書で示す標高地は、多可町建設課設定のB.Mを使用した値である。方位は座標北で示している。
- 5 本書記載の土器実測図断面は、土師器・土師質土器—黒、須恵器・陶器—白抜とした。また、土器実測図において、中心軸に沿って内外面の成形・調整表現が上下一直線にわたって欠する土器は、遺存率及び歪み等のため復元径に問題があることを示している。
- 6 遺物には通し番号を付し、図面、写真、表の番号は一致する。
- 7 清水・寺山谷遺跡の遺物実測図は、3次元デジタイザーを使用、もしくはデジタルトレーサーにより、すべてデジタルデータとして保管している。
- 8 本書の執筆・編集は、安平が行った。
- 9 本書に係る資料は、兵庫県多可郡多可町中区東山539-3 那珂ふれあい館で保管している。

本文目次

I	はじめに	1
	1. 地理的環境	1
	2. 歴史的環境	2
	3. 調査に至る経緯、調査体制	3
II	調査の概要	5
	1. 遺構の概要	5
	2. 遺物の概要	9
III	総括	12

表目次

出土及び表採遺物観察表 報告書抄録

挿図目次

第1図	多可町位置図	第2図	周辺遺跡分布図
第3図	遺構全体図	第4図	第1平坦地及び石垣1
第5図	第1平坦地石列	第6図	第2平坦地及び石垣2
第7図	石垣2断割土層	第8図	石垣3
第9図	出土遺物及び表採遺物	第10図	清水・寺山谷遺跡位置図
第11図	清水・寺山谷遺跡平坦地配置略図	第12図	位置図

図版目次

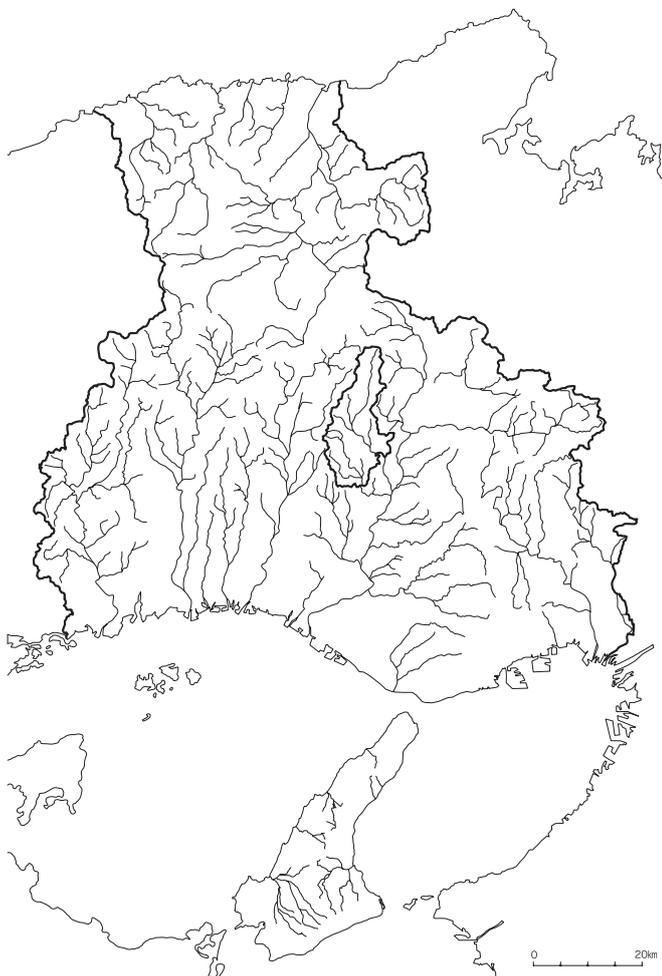
図版1	調査地（西から）	調査地（東から）
図版2	調査区全景（南から）	調査区全景（北から）
図版3	調査区全景（東から）	調査区全景（西から）
図版4	第1平坦地 石垣1 石垣1細部 石垣1断割 石列	
図版5	第2平坦地 石垣2 石垣2細部 石垣2断割	
図版6	南斜面 南斜面及び石垣3 石垣3	
図版7	上段部石垣① 上段部平地② 上段部石垣③	
図版8	上段部石垣③ 上段部石垣③ 上段部石垣③ 上段部石垣③	
図版9	下段部石垣④ 下段部石垣④ 下段部石垣⑤ 下段部石垣⑥	
図版10	出土及び表採遺物	

I はじめに

1. 地理的環境

多可町は、17年11月1日に旧中町、加美町、八千代町が合併して誕生した新町である。

当町から南方の神戸市沿岸部までは約45km、北方の豊岡市沿岸部までは約70kmの直線距離にあり、兵庫県のほぼ中央部、播磨最北端に位置する。行政境は、北は丹波市、朝来市、東は丹波市、南は西脇市、加西市、西は神崎郡神河町、市川町にそれぞれ接しており、東西約13km、南北約27km、総面積185.15 k m²の町域を有する。町域の約79.8%を山林地帯が占めており、特に町北部には標高692.6mの妙見山、939.4mの笠形山、1005.2mの千ヶ峰など600～1000m級の山々がそびえる山間地帯である。町内は三国岳を源とする杉原川が加美区、中区の中央部を貫流し、笠形山を源とする野間川が八千代区の中央部を南流して谷底平野を形成している。



第1図 多可町位置図

気候は、瀬戸内気候の影響下にあるが、内陸性気候の影響も受け、寒暖の差が比較的大きい。

主な産業は、古くから農林業、繊維産業を中心として発達してきたが、近年の経済、社会状況の変化、人口構成年齢の高齢化、過疎化など、農山村地域を取巻く状況が厳しい中であって、新たな産業の導入・振興が模索されている。

清水・寺山谷遺跡は、加美区北部地域に位置する。加美区北部地域は多可町の北端にあつて、丹波市と接しており、杉原川に沿ってのびる国道427号の播州トンネルを超えると丹波市青垣町に抜ける。また、現在はほとんど使われていないが、鳥羽から西側三国岳を超え但馬へ抜けるルートや、東側の清水坂を超え丹波市氷上町へと至るルートも古くは幹道のひとつとして使われていたと伝えられる。当遺跡は、西側山塊、字崎舟山から、谷平野部を南流する杉原川へ流れ込む、寺山谷川の北側の山麓斜面に広がっている。



- | | | | |
|-----------|--------------|-------------|-------------|
| ①清水・寺山谷遺跡 | ④鳥羽・小町遺跡 | ⑦清水・高山付近散布地 | ⑩清水・山城遺跡 |
| ②清水鉾山跡 | ⑤西宮神社周辺地区散布地 | ⑧清水・渦ノ本遺跡 | ⑪雲門寺周辺地区散布地 |
| ③半浄寺遺跡 | ⑥清水・オノ神遺跡 | ⑨清水・タカアゼ遺跡 | ⑫清水・山城地区散布地 |

第2図 周辺遺跡分布図

2 歴史的環境

清水・寺山谷遺跡が位置する、清水地区は、800m級の山間に広がる谷平野部に広がっており、地区内には中世～近世期の遺跡や散布地が広がっている。現在、集落東側山裾には、加美区北部地域に檀家を持つ禅宗寺院雲門寺が位置している。開山は南北朝～室町時代の禅僧、愚中周及によるものと伝えられており、当初は、清水・寺山谷遺跡が位置する崎舟山山中にあったものが、数度の移転ののち、現在の場所に再興されたと伝えられる。清水・寺山谷遺跡周辺には、遺跡名のもととなった『寺山』や『寺屋敷』など、寺院関連の通称名が残されているほか、雲門寺開山である愚中周及が開いたとされる『奥山地蔵』などがある。また、当遺跡範囲内には、中世期の遺物が広く散布し、人工的な平坦地が階段状に広がり、中には石垣に区画されたものもある。特に最上部の区画では、長さ約50mにわたって、4～5段積み、高さ約2mの巨石を使った石垣が築かれている。

そのほか、谷平野部においては、旧雲門寺で使われたと考えられる中世末と近世期の2基の梵鐘鑄造遺構が検出された清水・タカアゼ遺跡や、中世墓が検出された清水・オノ神遺跡、溝や柱穴群を検出した清水・渦ノ本遺跡など、中世期の遺跡や遺物散布地が広がっている。

3. 調査にいたる経緯、調査体制

【確認調査】

平成22年度、当該地における谷止工構造物（堰堤）の新設が、北播磨県民局（加東農林振興事務所）において計画された。この計画に基づき、兵庫県教育委員会が分布調査を行ったところ、計画地は、多くの平坦地や中世期の遺物が散布している清水・寺山谷遺跡の範囲内に位置しており、平坦地の一部が工区内に含まれていることが判明した。

上記の結果を受けて、兵庫県教育委員会は、遺跡の広がりを確認するため確認調査を行った。

- ・調査主体 兵庫県教育委員会
- ・調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第1課 西口圭介
- ・調査の種別 確認調査
- ・調査期間 平成22年11月11日
- ・調査面積 6 m²

確認調査の結果、出土遺物は確認されなかったが、寺院跡に伴うと考えられる数か所の石垣が検出され、工区内の遺跡にかかる部分についての本発掘調査が必要とされた。

【本発掘調査】

確認調査の結果を受けて、本発掘調査が必要となった。

谷止工構造物（堰堤）の新設事業は、事業の緊急性及び工期等の都合上、平成23年度中の終了が必要とされていたが、兵庫県教育委員会では県内各地での発掘調査を継続中であり、当遺跡の年度内の本発掘調査を実施することが不可能となっていた。

そこで、地元である多可町教育委員会、北播磨県民局（加東農林振興事務所）、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）の三者で協議の結果、本発掘調査及び整理・報告作業については、多可町教育委員会が主体となって行うこととなった。

- ・調査主体 多可町教育委員会
- ・調査担当者 安平勝利
- ・調査補助員 松田優子
- ・調査期間 平成23年3月2日～3月27日
- ・調査面積 約150m²

* 整理・報告作業は平成23年度事業として行った。

《発掘・整理作業従事者》

小西繁利 徳平麻希 中川虎男 中道和三男 早崎喜代美 森野恵三郎 山口忠志
安平千恵美 吉田衣里

《調査・整理作業協力者、協力機関》

兵庫県教育委員会文化財室 兵庫県立考古博物館 北播磨県民局加東農林振興事務所
(株)秀組 西脇市・多可郡広域シルバー人材センター

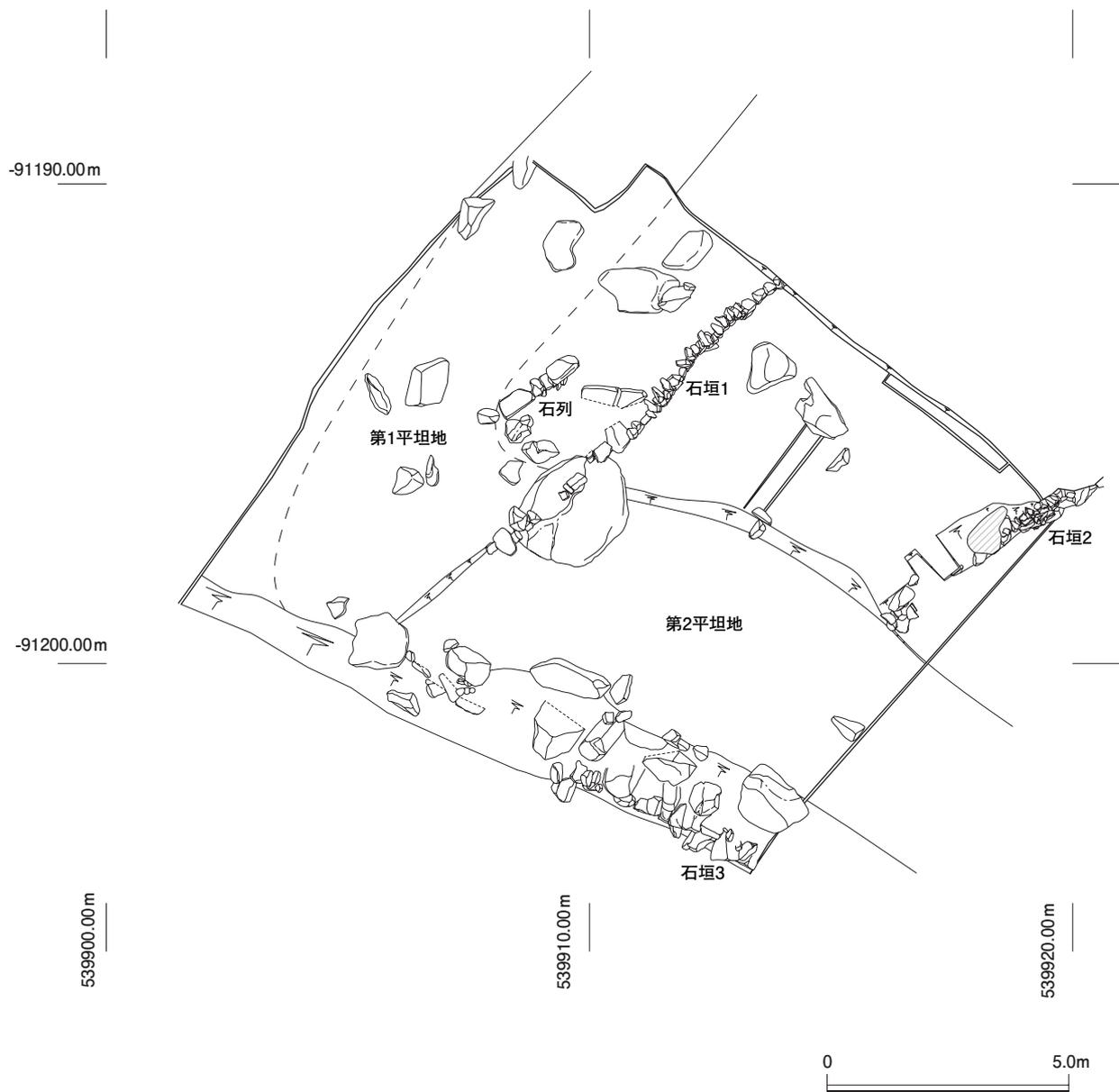
作業風景



作業風景



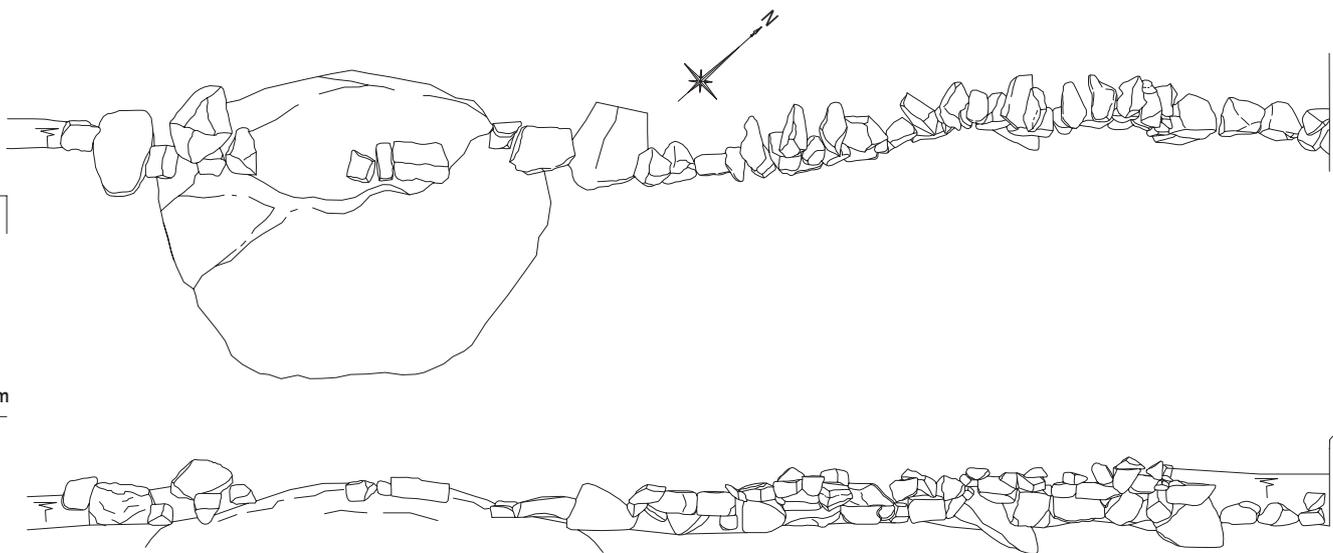
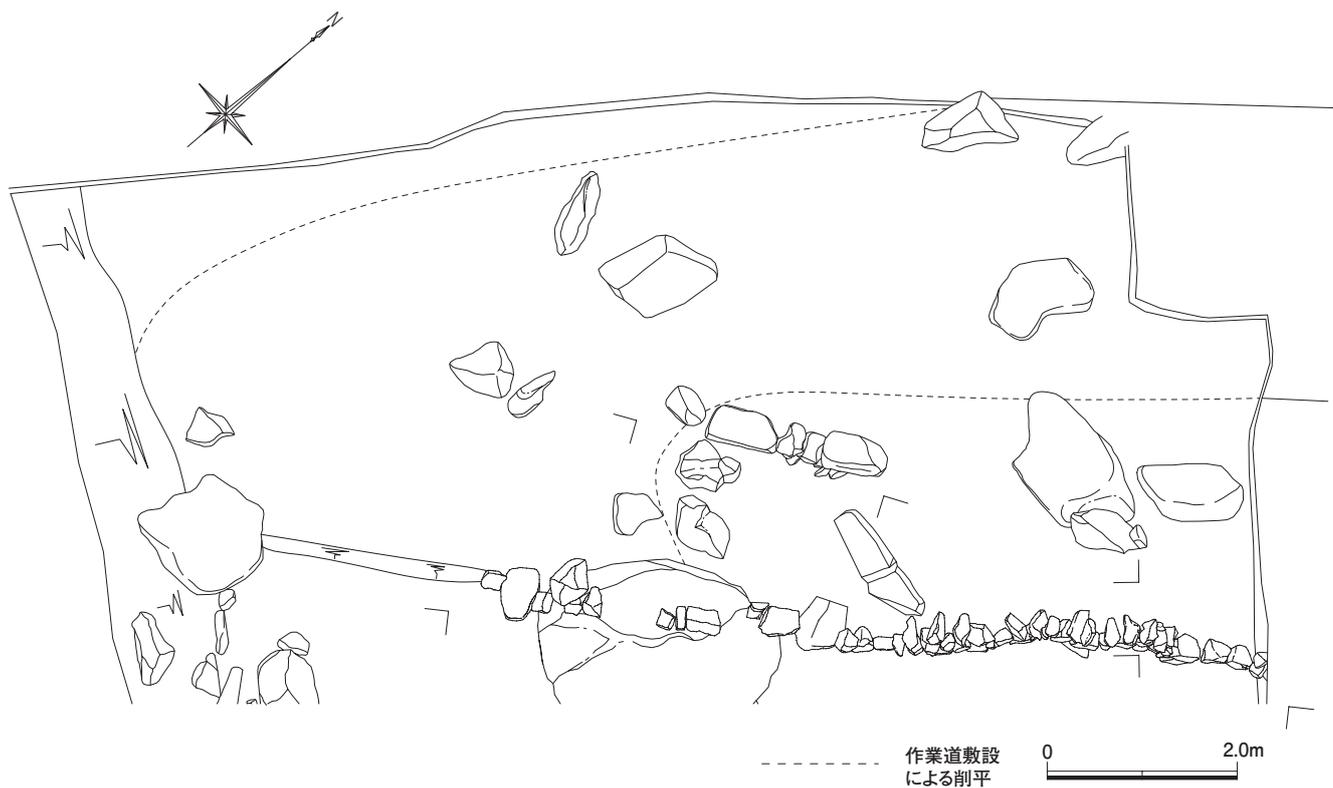
Ⅱ 調査の概要



第3図 遺構全体図

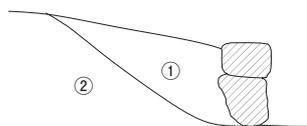
1. 遺構の概要

遺構面はほぼ表土直下で検出されたが、調査区内を旧堰堤建設時の作業道が逆L字型に走っており、かなり削平を受けた状態であった。平坦地は、東へ傾斜する地形を削平によりつくり出されており、それぞれの平坦地は石列、石垣により区画されている。遺物の出土は少なく、埋土よりわずかに中世期の須恵器、陶器の小片が出土した。



285.00m

- ①10YR4/2 灰黄褐色土
- ②10YR黄褐色土 (地山)



第4図 第1平坦地及び石垣1

【第1平坦地】

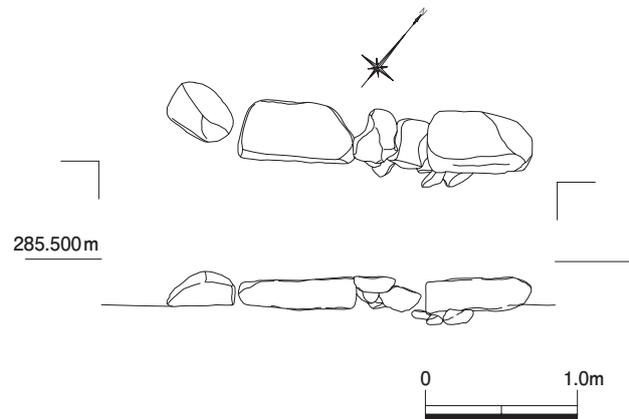
第1平坦地は、長辺約11m、短辺約6mの長方形を呈し、東端に石垣1を積み上げることによって形成されており、第2平坦地との比高は約42cmを測る。また、平坦地東側には石列が石垣1に並行に配されており、幅約2mの犬走り状の小区画がつくられている。平坦地南側は谷地形となっており谷川までの比高は約2.2mを測り、法面にも当初は石垣が積まれていたと思われるが、現状では大半が崩落している。西側は、一部が調査区外へと続くが、地形的に自然傾斜地となっているため、調査区西端がほぼ平坦地の西端にあたると思われる。平坦地上面での遺構は検出されなかったが、平坦地埋土より中世期の須恵器、陶器の小片が出土している。

【石垣1】

第1平坦地の東端を区画する南北に延びる石垣。南半部は作業道敷設時に破壊されており、北半部の検出となった。地表面に出ていると思われる自然石を部分的に利用しながら、長軸方向を石面に直行する方向に据えた、石面径約20～30cmの石材が2～3段積まれており、石垣の高さは約30～40cmをはかる。当初はおそらくもう1～2段程度積まれていたものと推測される。石垣の裏込め石はみられないが、裏込め埋土より14世紀代と思われる丹波焼片が出土している。

【石列】

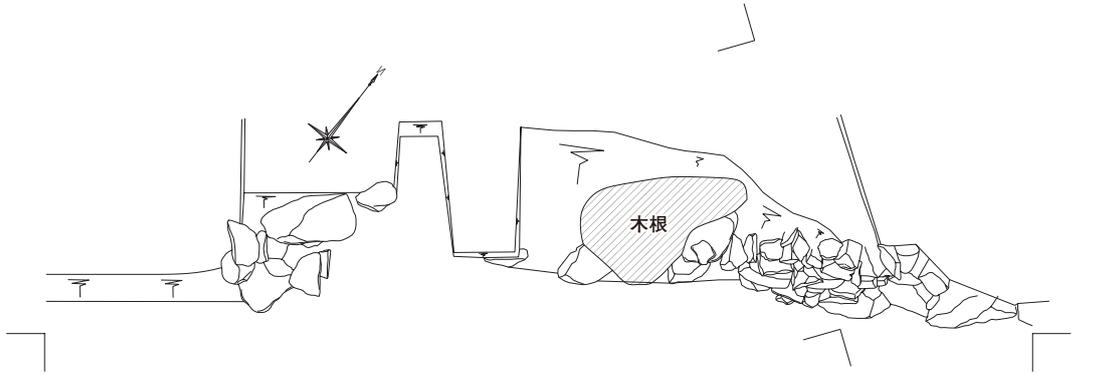
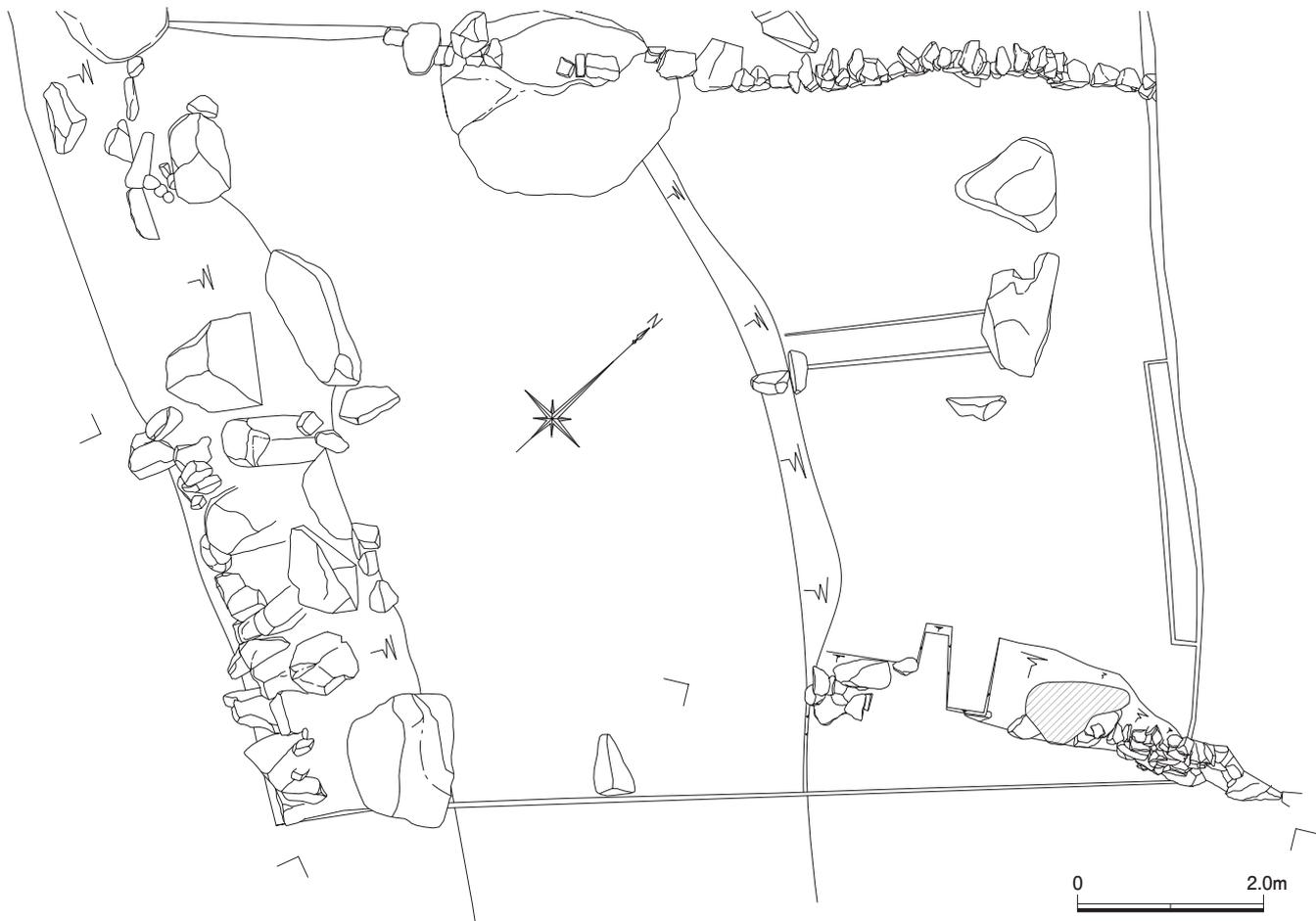
石垣1に並行して伸びる石列。大半が作業道敷設時に破壊されており、わずかに4石が残るのみである。長辺70×短辺40cm、高さ20cm前後の石を中心にして、長辺を石面に使用して配石される。石垣1との間隔は約2mをはかり、通路状の小区画をつくり出している。



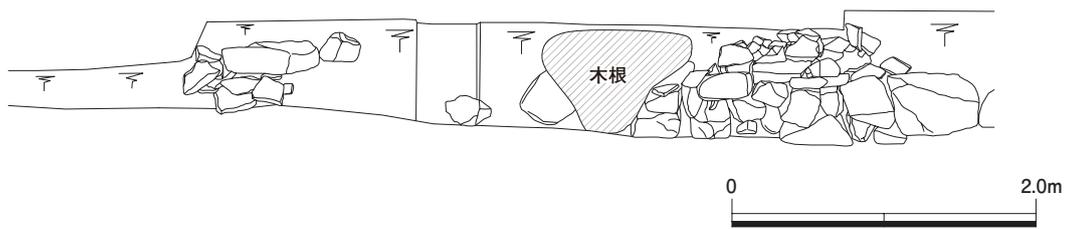
第5図 第1平坦地石列

【第2平坦地】

第2平坦地は第1平坦地東側にあつて、長辺約11.0m、短辺約6.5mの長方形の敷地で、東側に石垣2を積み上げることによって形成されている。南側は谷地形で比高約1.6m、石垣2以東との比高は約75cmをはかる。平坦地の南半分は作業道敷設時に削平されており、平坦地上面での遺構は検出されなかったが、埋土より中世期の須恵器、土師器、陶器の小片が出土している。

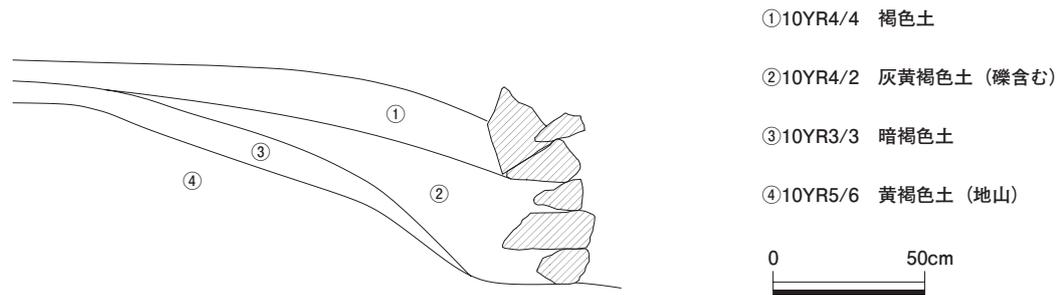


285.000m



第6図 第2平坦地及び石垣2

285.00m



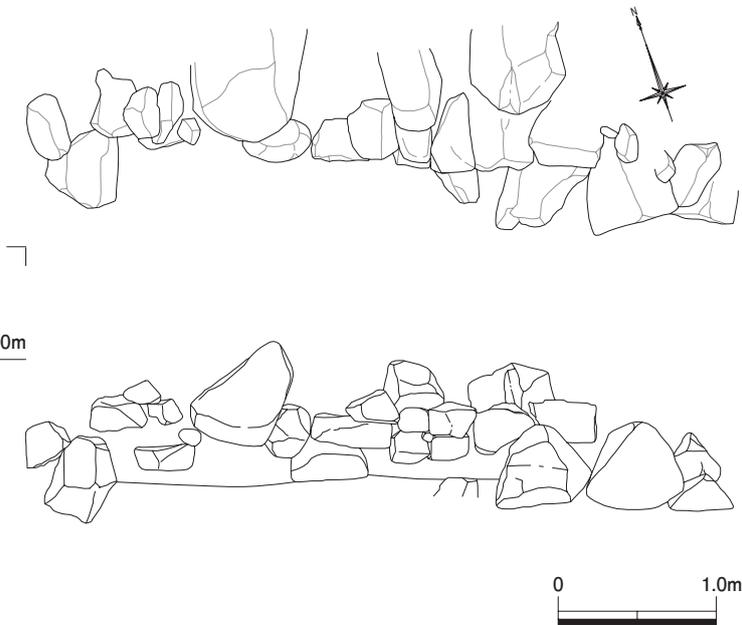
第7図 石垣2断割土層

【石垣2】

第2平坦地の東側を区画する石垣。石垣1と同様、南半部が破壊されており、北半部も木根により崩されているため一部の検出となった。15~20cm前後の自然石による乱積みで、高さは約75cmをはかる。裏込めには礫を多く含む埋土が使われている。

【石垣3】

第1・2平坦地の南側は谷川が東西に流れており、比高差2.2~1.6mの谷地形が各敷地の南端を形成している。法面には当初、石垣が積まれていたと思われるが、一部を除き大半が崩落している。かろうじて、斜面中位の約5mにわたる部分のみ石垣が残っており、石垣3とした。石垣は、地表面にあらわれる大きな自然石



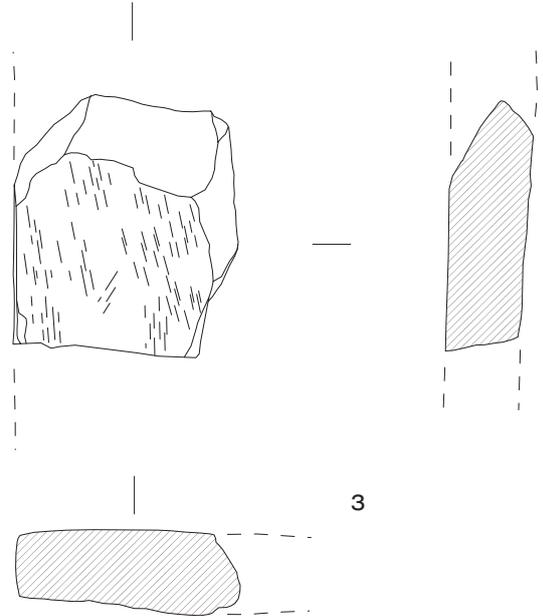
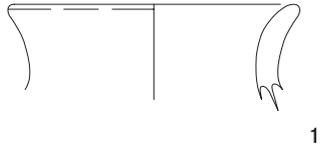
第8図 石垣3

を利用しながら、法面に貼り付けるようなかたちで積み上げられており、裏込め石は使われていない。埋土より中世期の須恵器、土師器の小片が出土している。

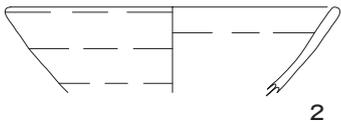
2. 遺物の概要

主に平坦地や南側斜面埋土から、中世期の須恵器、土師器、陶器小片が出土したが、量的には少なく、図化に耐え得るものもわずかである。しかしながら、調査区周辺の平坦地群においても多くの遺物が散布しており、あわせて掲載する。

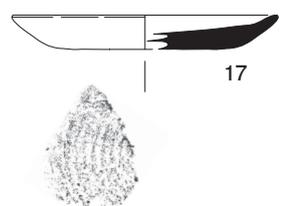
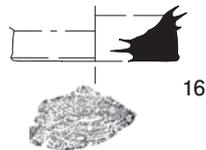
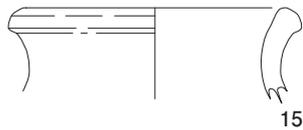
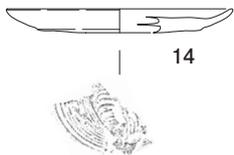
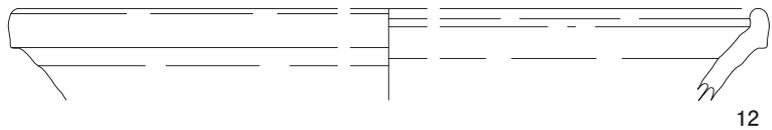
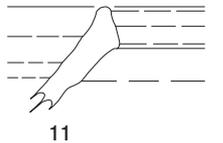
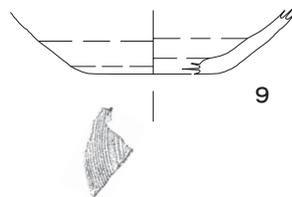
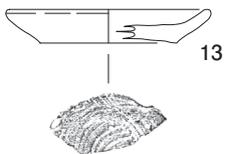
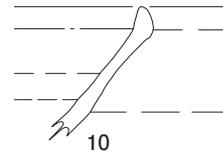
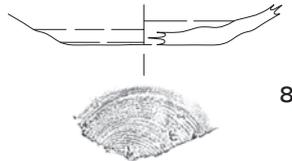
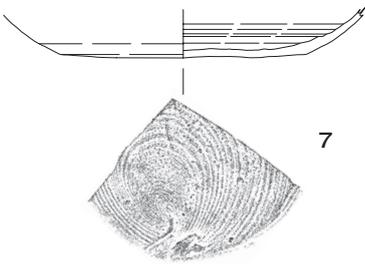
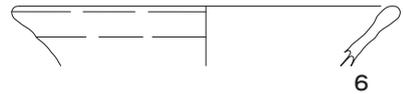
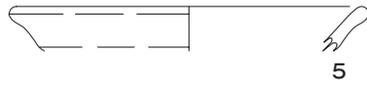
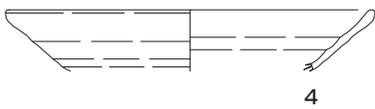
第1 平坦地埋土



第2 平坦地埋土



表採 (D地区)

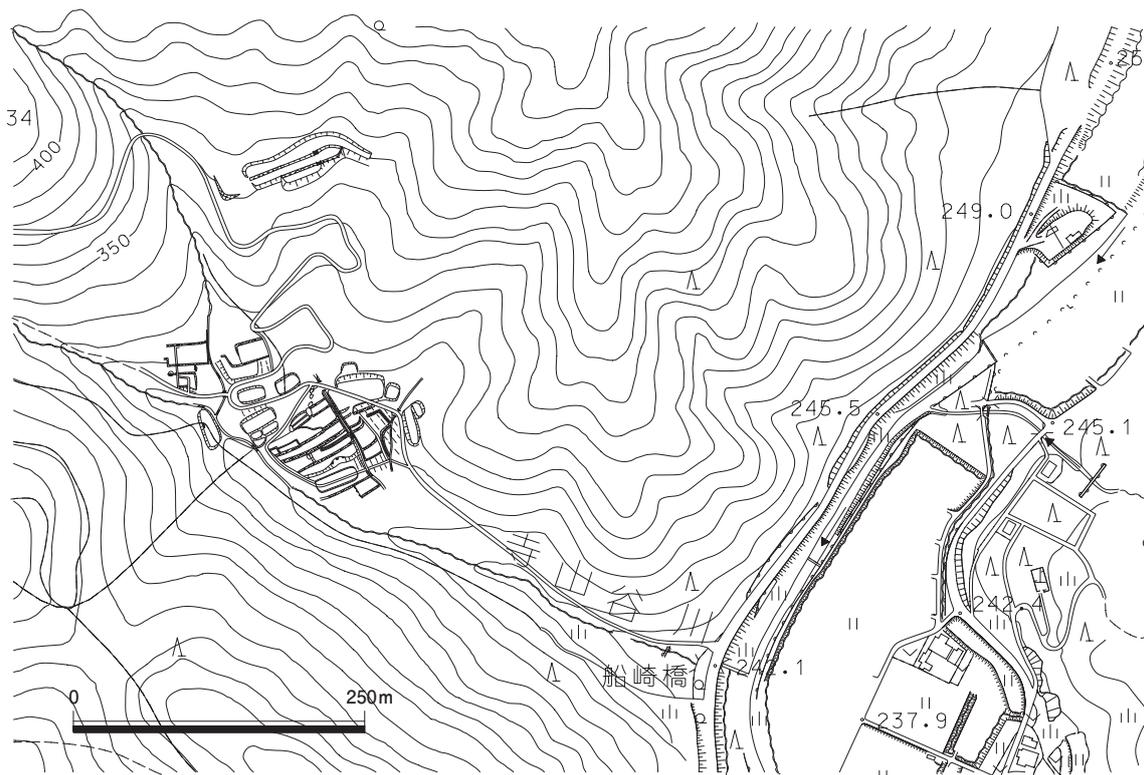


第9図 出土及び表採遺物

中心となるものは、須恵器の山茶碗、鉢、小皿など、13世紀代を中心としたものである。しかしながら、量的には少ないが、平安時代後半にさかのぼると思われる、回転糸切が施され、高さのある高台を持つ古手の土師器碗（16）や、14～15世紀代の丹波焼（1・15）など、中心となる時期の前後を示す遺物もみられることから、平安時代後期頃にはじまり、鎌倉～室町時代にその活動は最盛期を迎え、中世末期に終焉を迎える当遺跡の活動幅がみてとれる。

出土及び表採遺物観察表

番号	出土場所	種類	器種	口径	底径	器高	調整		色調	備考	実測番号
							外面調整	内面調整			
1	第2平坦地埋土	丹波焼	壺	11.3	-	-	ヨコナデ オリーブ釉	ヨコナデ	5YR5/4にぶい赤褐色		005
2	第1平坦地埋土	須恵器	山茶碗	12.9	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/灰		004
3	第2平坦面埋土	石製品	砥石	-	-	3.0			-		006
4	調査区周辺表採	須恵器	山茶碗	14.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/灰白	山林1	012
5	調査区周辺表採	須恵器	山茶碗	13.6	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/灰白		003
6	調査区周辺表採	須恵器	山茶碗	14.7	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5PB7/1明青灰	山林7	007
7	調査区周辺表採	須恵器	山茶碗	-	9.7	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	5B4/1暗青灰		001
8	調査区周辺表採	須恵器	山茶碗	-	6.3	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	N6/灰	山林2	014
9	調査区周辺表採	須恵器	山茶碗	-	5.3	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	10Y8/灰白		002
10	調査区周辺表採	須恵器	鉢	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y6/1灰	山林3	013
11	調査区周辺表採	須恵器	鉢	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/灰白	山林4	015
12	調査区周辺表採	須恵器	鉢	-	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N7/灰白	山林5	010
13	調査区周辺表採	須恵器	小皿	7.7	5.6	1.3	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	5PB6/1青灰	山林6	011
14	調査区周辺表採	須恵器	小皿	8.9	6.5	0.9	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ 底面研磨	5P B6/1青灰		017
15	調査区周辺表採	丹波焼	壺	10.3	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/灰	山林8	009
16	調査区周辺表採	土師器	山茶碗	-	6.6	-	ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	5YR7/6橙	山林9	008
17	調査区周辺表採	土師器	小皿	10.3	6.0	1.3	口縁部ヨコナデ 底部回転糸切	ヨコナデ	7.5Y R8/6浅黄橙		016



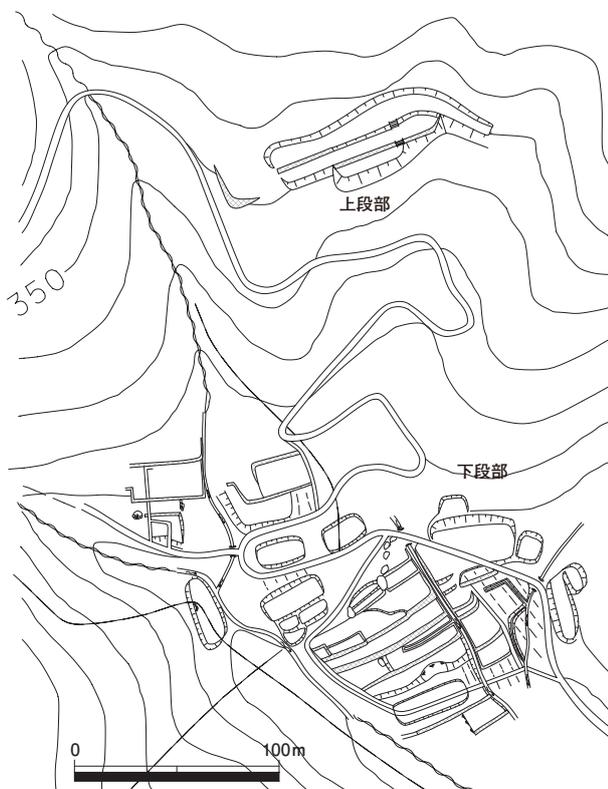
第10図 清水・寺山谷遺跡位置図

Ⅲ 総括

【清水・寺山谷遺跡について】

清水・寺山谷遺跡は、崎舟山山中の標高280m～350m付近の谷部北側斜面に、階段状の平坦地群が広がる、いわゆる山林寺院遺跡で、平坦地群は標高350m付近に広がる上段と280～300m付近に広がる下段の2群に分けられる。現在の清水集落からの比高は下段部で約40m、上段部で約100m、直線距離では約600mの位置にある。周囲は、『寺山』と称され、上段部には『寺屋敷』と言う通称がのこる。

上段部は、等高線にそった横長の平坦地が階段状に3段形成されており、平坦地の区画には、主に50cm～1m前後の巨石を使用した4～5段積み、高さ2m以上の石垣



第11図 清水・寺山谷遺跡平坦地配置略図

が東西延長約50mにわたって築かれている。おそらく本堂的役割を担った平坦地群であろうと思われる。

下段部は少なくとも38か所の平坦地が、寺山谷川北側の谷裾部の傾斜に沿って階段状に築かれている。各平坦地の多くは石垣によって区画されているが、上段部と比べると小ぶりの石を使用し、石垣の高さも低いものが多く、小区画のものが密集した状態にある。

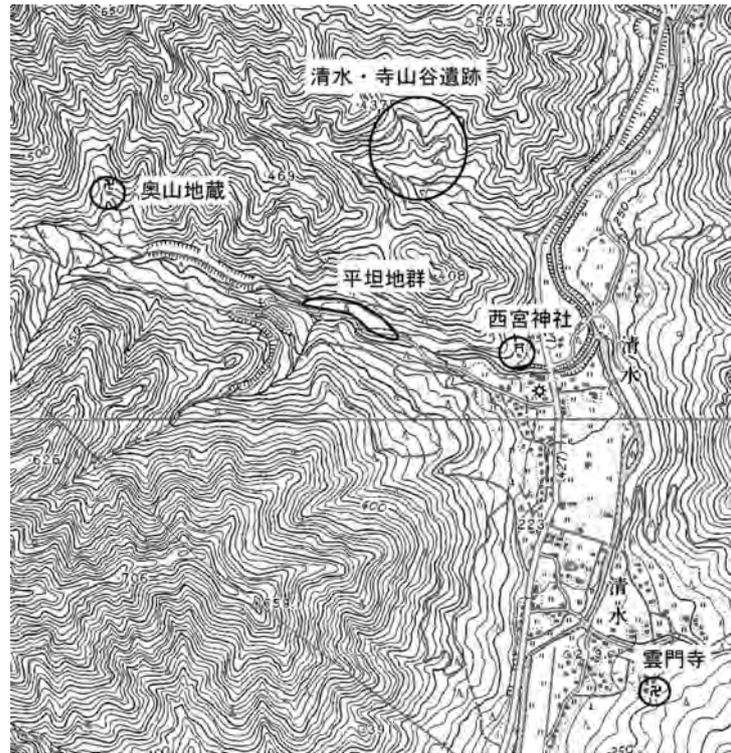
寺域内の分布調査では、上段部ではほとんど遺物の分布はみられず、下段部において、13世紀を中心とする中世期の遺物が多く採集されている。こうした上段部と下段部の差は、平坦地の機能・役割の違いをあらわしているものと思われる。

【奥山地蔵について】

奥山地蔵堂は、崎舟山山中の標高約360m付近、清水集落からは直線距離で約1.5kmの谷奥部に位置しており、清水・寺山谷遺跡の南、尾根を隔てた谷奥部にあたる。

現在、敷地内には地蔵堂、籠堂、薬師堂（明治期に西宮神社付近から当地に移転）が建っており、周囲には数か所の平坦地群がみられる。地蔵堂には山肌につくられた石室内に、愚中周及が祀ったと伝えられる地蔵菩薩の石像が安置されている。また、敷地内には明治32年に建てられた『佛徳大通禪師舊跡』と刻まれた石板や、『・・・景德小庵・・・』の愚中周及の漢詩が刻まれた石板が建てられている。

愚中周及（1323～1409）は、夢窓疎石に師事し、1343年には中国に渡航、1351年帰国後には丹波天寧寺（1365年開山）、安芸の佛通寺（1397年開山）の開山となった、南北朝時代の臨済宗の僧。現在清水地区の



第12図 位置図



奥山地蔵堂遠景



地蔵菩薩立像

東の山裾に位置する雲門寺も愚中周及を開山とする。雲門寺の寺伝によると、雲門寺は当初、現在の奥山地蔵堂の場所に、応永8年（1401）、愚中周及によって『景德庵』と言う小庵が建てられたのはじまりであると伝えられる。現在の雲門寺はその後、数度の移転を繰り返した後の姿である。『佛徳大通禪師語録』には『八年辛巳 時師七十九歳 春竊去金山。



石碑①



石碑②

抵播州杉原 寓于安樂寺。去寺不遠有古禪刹。號雲門。師愛其地幽僻。卓景德菴。菴前有窩安地藏像。像前疊石爲塔。名若耶。冬佛通檀 越堅請還藝州』とあり、『応永8年（1401）春、愚中禪師79歳の時に、丹波金山郷にあった天寧寺を去り、播州杉原の安樂寺に立ち寄った。近くに雲門と呼ばれる古禪刹があり、その幽僻地を愛した師は景德庵という庵を建て、その前の岩穴に地藏尊を安置し、像の前には塔を建て若那と名付けた。冬には藝州の佛通寺からの要請を受けて、佛通寺へと帰った』と記されている。同様の記事は、『卯余集』¹⁾等にもみられる。

したがって、応永8年（1401）に愚中禪師が立ち寄った時には、当該地周辺に『安樂寺』と称する寺院がすでにあり、その近くに『景德庵』と言う小庵を建てたことがうかがえる。

現在の奥山地蔵尊周辺には数か所の平坦地が観察されるが、当時既にあった『安樂寺』に伴うものか、愚中周及が景德庵を建てた以後の、いわゆる雲門寺の前身寺院にあたるものかは定かでない。

【西宮神社について】

西宮神社は奥山地蔵尊と清水・寺山谷遺跡を隔てる尾根裾先端部に位置し、西宮大明神、青玉大明神、大歳大明神の三神を祭る。現存する棟札には、応永17年（1410）の紀年銘、木製狛犬には明徳4年（1393）の銘が記されており、中世期に遡る創建が確認される。延宝5年（1677）の『清水村検地帳』には除地として、西宮神社の宮寺として『光明院』の存在が記されており、古検（慶長期の検地）でも除地とされていた旨が記されているほか、元禄7年（1694）の『清水村古絵図』でも、神社西側に宮寺光明院の存在が確認される。また、安政4



清水西宮神社



清水西宮神社 狛犬（明徳4年墨書銘）

年（1775）～天明元年（1781）の『清水村寺社一件書上』からは、当時、宮寺光明院は真言宗であり、岩座神光寺（真言宗）住職が兼務していたことが知られるほか、天明9年（1789）の清水村明細帳では、『安楽寺光明院』としての記述もみられる。

これらのことから、光明院は、少なくとも慶長期の検地以前から存在しており、『安楽寺』と言う寺院の坊院であった可能性が強いと考えられる。



清水地区古絵図（元禄7年）

【ま と め】

以上、清水地区西方にそびえる崎舟山の山裾に位置する、清水・寺山谷遺跡、奥山地蔵、西宮神社について概観した。清水・寺山谷遺跡は、今回の調査からも伺えるように、階段状の平坦地を有する13世紀を中心とする山岳寺院。その南側、西からのびる尾根を挟んで位置する奥山地蔵は、雲門寺の開山の祖である愚中周及禅師が、応永8年（1401）に『景德庵』という庵を建てて留まったことをはじめとするが、当時、既にこの地に存在していた『安楽寺』に立ち寄ったことが契機となった経緯が『語録』に記されている。西宮神社は中世期（14～15世紀）に遡る創建であり、『光明院』という宮寺も中世期から存在していたことが確認できる。さらに、『光明院』は、『安楽寺』の坊院であった可能性が強い。

これらのことから、当該地周辺に、中世期には存在していた『安楽寺』と言う寺院の存在が浮かび上がる。現在『安楽寺』については上記資料以外、管見にはなく、地元においても忘れられた存在となっている。

今回発掘調査を行った、清水・寺山谷遺跡の周辺には、前述のとおり、現在も「寺山」、「寺屋敷」、「寺上」、「寺下」など、寺を意識した通称名がつけられており、巨大な石垣を持つ平坦地群が広がっていることから、清水・寺山谷遺跡が『安楽寺』もしくはその前身の山岳寺院である可能性が強い。

しかしながら、現在残る歴史資料が少ないこと、清水・寺山谷遺跡の活動の中心が13世紀（表採資料から）であり、奥山地蔵、西宮神社とは若干時期差がみられることなどから、現時点で確証を得る段階にはなく、あくまで可能性を示すにとどめ、今後の資料の増加を期待したい。

1) 『五山文學全集 第三巻』 上村観光編 (株)思文閣刊

報 告 書 抄 録

ふ り が な	きよみず・てらやまたにいせき							
書 名	清水・寺山谷遺跡							
シ リ ー ズ 名	多可町文化財報告							
シ リ ー ズ 番 号	18							
発 行 機 関	兵庫県多可郡多可町教育委員会							
編 著 者 名	安平勝利							
編 集 機 関	多可町教育委員会							
所 在 地	〒679-1134 兵庫県多可郡多可町中区茂利20番地 Tel.0795-32-2385							
発 行 年 月 日	2012年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きよみず てらやまたにいせき 清水・寺山谷遺跡	ひょうごけんたかぐんたかちょうかみ 兵庫県多可郡多可町加美 くきよみず 区清水	2833	270012	35度 10分 35秒	134度 55分 30秒	2011.3.2 ～ 2011.3.27	約150㎡	谷止工構 造物建設 に係る事 前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
きよみず てらやまたにいせき 清水・寺山谷遺跡	寺院跡	中世	平坦地・石垣	須恵器、土師器		石垣で区画された 2カ所の平坦地を 検出		

図 版



清水・寺山谷遺跡遠景



調査地（西から）



調査地（東から）



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



第1平坦地



石垣1



石垣1 細部



石垣1 断割



石列



第2平坦地



石垣2



石垣2細部



石垣2断割



南斜面



南斜面及び石垣3



石垣3



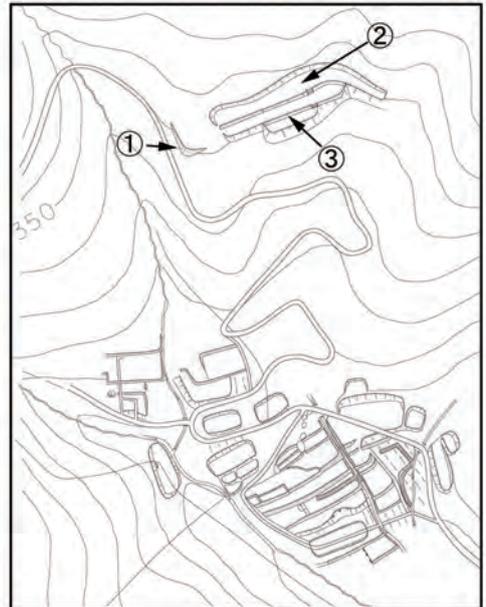
上段部石垣 ①



上段部平坦地 ②



上段部石垣 ③





上段部石垣 ③



上段部石垣 ③



上段部石垣 ③



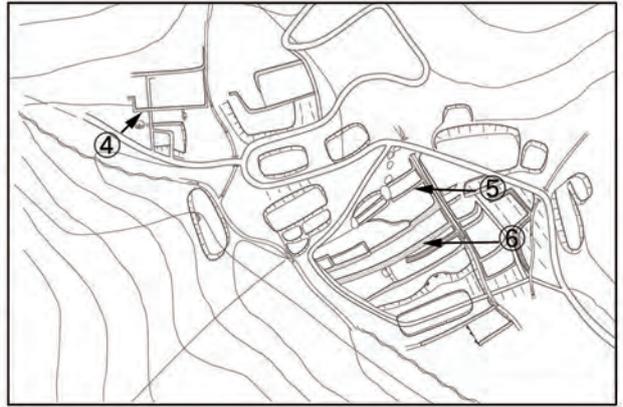
上段部石垣 ③



下段部石垣 ④



下段部石垣 ④



下段部石垣 ⑤



下段部石垣 ⑥



出土及び表採遺物

多可町文化財報告18

きよみず てらやまたに いせき
清水・寺山谷遺跡

2012年3月

発行 多可町教育委員会
〒679-1134 多可郡多可町中区茂利20番地
TEL. (0795) 32 - 2385

印刷 株式会社吉本宝文堂

■データー 紙質 表紙 アートポスト220kg (マットPP加工)
見返し 色上質 特厚口
本文
カラー図版
文字 モリサワ 14級
製本 無線トジ